

# 工科系学生の心理特性とアイデンティティ 形成上の諸傾向, その覚え書\*

—本学学生へのアンケート調査結果に基づいて—

重本直利\*\*

(昭和58年4月30日受理)

## A Note on the Psychology and Identity of Technology Students

by Naotoshi SHIGEMOTO

### 目次

まえがき	115
I. 調査対象学生の基本的属性	117
II. 工科系学生の心理特性等に関する検討	119
III. アイデンティティ形成上の諸傾向	125
今後の課題	131

The present paper is based on the questionnaire given to our students. Today, the advance of science and technology is closely connected with human nature, of which the advance of computer science and information processing technology is an especially important aspect.

This paper is a part of a larger research directed toward the analysis of human psychology and behavior that is affected by information society.

The goal of this paper is to examine the psychology and identity of technology students. Specifically, it aims at clarifying the life situations and psychological properties of these students, and the several tendencies in the formation of identity.

### まえがき

*The Third Wave* の著者 A. トフラーは、「新しい精神体系」に関して次のような問題点を提起している。

「新しい文明が形づくられようとしている。しかし、われわれはその文明のなかで、はたし

\* 昭和57年度日本社会心理学会第23回大会で一部発表(昭和57年11月)

\*\* 北見工業大学一般教育等

てふさわしい場を持てるだろうか。今日の技術革新や社会変革の波のなかで、友情、愛、献身、共同体、他人への配慮というようなものは消えてしまうのではないか。エレクトロニクスの驚異的な発達によって、人間関係はいまよりさらに希薄になり、間接的なものになりはしないだろうか。

このような問いかけは、必ずしも的はずれとは言えない。恐怖心を抱くのはあたり前で、そうした恐怖心から、当然これらの問いが発せられる。それを無視できるのは愚直なテクノクラートだけである。自分たちの周囲を見わたせば、現代が心理的挫折の時代であり、心の問題で悩む人が、実に多いことがよくわかる。われわれに共通な心理構造に爆弾がぶちまかれ、それが炸裂したかのように見える。事実、われわれは第二の波の技術体系、情報体系、社会体系の崩壊ばかりでなく、心理体系の破綻をも経験しているのである。

青少年の自殺の増加、アルコール中毒の急増、うつ病の蔓延、破壊行為、犯罪などの問題は、豊かな社会と言われる現代社会の共通の悩みである。アメリカでは、ノイローゼ患者は言うにおよばず、マリファナ患者、スピード狂、睡眠薬遊びをする未成年者、コカイン中毒者、ヘロイン中毒者などで、救急病院は満員である。

いずこも、社会事業と精神衛生関連産業が大繁盛だ。ワシントンでは、精神衛生に関する大統領の諮問委員会が、アメリカ国民の少なくとも四人にひとり、なんらかの形で重度のストレス患者である、と発表している。また、国立精神衛生研究所の心理学者は、どういふ症状にせよ、精神的障害を持った人間が家族にひとりもないという家はまずないという事実を指摘し、こう述べている。『混乱し、分裂し、未来に不安を抱かせるアメリカ社会には、心理的な動揺が蔓延している。』

精神病の定義そのものがいまいであったり、統計のとり方に問題がある場合もあるので、こうした大ざっぱな議論には疑問がないわけではないし、昔の方が精神的に健全だったというのも、真実からはほど遠い。にもかかわらず、現代の社会は、どこかひどく病んでいる<sup>1)</sup>。

今日、科学・技術進歩のもつ意味が人間そのものの在り方に関わる広さと深さをもってきている。

科学・技術、とりわけ情報化・コンピュータ化の進展が、その社会における人間の心理・行動の在り方に強い影響を与えており、これとの関連で人間の心理・行動を分析することが重要な課題となってきた。

それは、情報化社会として代表される科学・技術の時代が広く深く浸透する中で、新たなアイデンティティ<sup>2)</sup>形成上の諸問題が出てきているとも言える。我々はこうした問題と関わって現代人の今日の特徴をみていく必要がある。

本稿でとりあげる工科系学生の心理と行動は、こうした状況下で様々な青年層の中でも一つの主要な時代的特徴の一側面を具備しているものと言える。

以上の点が本稿執筆にあたっての視点ではあるが、情報化・コンピュータ化の急激な揺籃

期に入っている現在, それはあくまで基本的視点(研究の方向性)にすぎぬものであると言わざるをえない。すなわち本稿は情報化社会における現代人の心理と行動<sup>3)</sup>の分析という極めて今日的で重要なテーマに関する一アプローチにとどまるものである。従って本稿に与えられる課題は, 工科系学生の心理とアイデンティティ形成上の諸傾向の概観という性格のものとして限定される。

なお調査は, 本年2月に「現代青年心理とアイデンティティ形成に関するアンケート(全31問)」と題して実施されたものである。調査項目については本稿末尾に収録されている。項目に関しては全体を5つの群にわけており, I群は基本的属性, II群は生活の基本的状況, III群は主に心理特性, IV群はアイデンティティ形成, V群は将来の生き方に関して各々分けられている。

#### 注)

- 1) A.トフラー・徳山二郎監修『第三の波』日本放送出版協会, 1980年, 520-521ページ。
- 2) 自己同一性。エリクソンの自我心理学及び発達理論の中心概念。内面性と外面性(社会性)の両面における人格の統合性と一貫性を表わす。なおエリクソンの自我の把握の特徴について南博氏は次のように述べている。「エリクソンのように, フロイトのいう精神発達段階に対して, より一般的な人生の危機とか、『モラトリアム』moratoriumの段階, あるいは自我の正体を求める『アイデンティティー』を重くみる立場も, 自我を社会生活の中で, 他人との関係において, 他人とはちがう自律性の確立を強調するものである。それは, 動乱のヨーロッパからアメリカへ逃れたきた亡命者たちが, 自分の存在, 自分の生活を新しい世界に求め, そこに根を下ろそうとするとき, 当然, 心の中に湧いてくる自我確立の要求と無縁のものではないように思われる。そのことは, エクソン自身の亡命者としての述懐にもうかがわれるのである」(南博『人間行動学』岩波書店, 1980年, 319ページ)。亡命者の立場にも似た「新しい世界」の出現が, 形態こそ違え今日の情報化社会と相通するところがあると思える。
- 3) この点に関わって, その基本的性格を次のように述べたことがある。「この D. S. (情報システム)化は如何なる基本的論理において, その構造と機能が規定されているのか。それは個々人の内的論理ではなく, 客観的・数理的な構造と機能である。簡単にいえばコンピュータのプログラムの基本原理としての0と1だけを使う表記法(“はい”なら1, “いいえ”なら0といった素子の状態変化)を基礎としたものである(J. von Neuman)。個々人の意思決定過程及び問題解決過程(Problem-Solving process)も, 基本的にこの表記法に根拠づけられ, この素子システムとしてのものとなる(H. A. Simon)。この限りでは個々の人間行動・意識は, D. S. のなかの一つの『情報処理体』としての取扱いにしかならない(思考のコンピュータ・シミュレーション)」(拙稿「D. S. (情報システム)化における個人的意思決定過程の性格に関する一考察——社会的意識形態の今日的及び日本の性格の解明にむけて——」, 日本社会心理学会第23回大会研究発表論文集, 1982年, 9ページ)。

### I. 調査対象学生の基本的属性

調査対象となった属性の項目は, 1. 学科, 2. 学年, 3. 出身高校所在地, 4. 兄弟姉妹の数, 5. クラブの加入, 6. 中学校・高校で好きであった教科, 7. 中学校・高校を通して好きであった系列, 8. 中学校・高校を通しての親友の数, 9. 同じく尊敬する教師の数についてであり, 次頁(表-1~8)の通りである。

この属性調査について若干コメントをしておきたい。対象学生数は516人であり, 少なく

表-1 学科及び学年別対象学生数

学 年	学 科								計
	機 械	応用機械	電 気	電 子	工業化学	環 境	土 木	開 発	
1	13.7 (17)	12.9 (16)	19.4 (24)	13.7 (17)	8.9 (11)	13.7 (17)	9.7 (12)	8.1 (10)	24.1 (124)
2	13.1 (35)	10.8 (29)	13.8 (37)	13.1 (35)	12.3 (33)	12.3 (33)	13.4 (36)	11.2 (30)	52.0 (268)
3	13.0 (16)	15.4 (19)	12.2 (15)	12.2 (15)	13.8 (17)	8.9 (11)	9.8 (12)	14.6 (18)	23.9 (123)
計	13.2 (68)	12.4 (64)	14.8 (76)	13.0 (67)	11.8 (61)	11.8 (61)	11.7 (60)	11.3 (58)	100.0 (515)

(注) 数字は百分率, ただし括弧内は実数 (以下同様)

表-2 地域別比率

北 見	14.6 ( 68)
札 幌	25.9 (121)
旭 川 等	21.2 ( 99)
上記以外の市	24.6 (115)
〃 町村	13.7 ( 64)
計	100.0 (467)

(注) なお道内外比率は89.9%と10.1%。旭川等は函館・小樽・室蘭・苫小牧・帯広・釧路市を含む。

表-3 兄弟姉妹数別比率

1 人	5.6 ( 29)
2 人	65.1 (336)
3 人	24.6 (127)
4 人 以上	4.7 ( 24)
計	100.0 (516)

(注) 本人を含む人数

表-4 クラブ活動参加比率

	運 動 ク ラ ブ	
	中 学 校	高 校
入っていた	58.6 (300)	38.5 (197)
入っていない	41.4 (212)	61.5 (315)

	文 化 ク ラ ブ	
	中 学 校	高 校
入っていた	24.5 (124)	31.3 (159)
入っていない	75.5 (382)	68.7 (349)

表-5 好きな科目 (中学校)

国 語	数 学	理 科	社 会	英 語	音 楽	美 術	体 育	技 術・家 庭	計
1.6 (8)	34.8 (179)	25.3 (130)	10.7 (55)	5.6 (29)	2.1 (11)	3.5 (18)	9.9 (51)	6.4 (33)	100.0 (514)

表-6 好きな科目 (高校)

現代国語	古 文	漢 文	数 学	物 理	化 学	地 学	生 物	地 理	日本史
1.9 (10)	2.7 (14)	0.2 (1)	27.4 (141)	14.6 (75)	9.9 (51)	1.6 (8)	4.3 (22)	3.9 (20)	3.7 (19)

世界史	倫 社	政 経	英 語	家 庭	体 育	美 術	音 楽	計
4.9 (25)	4.5 (23)	3.9 (20)	2.3 (12)	0.0 (0)	8.8 (45)	4.1 (21)	1.4 (7)	100.0 (514)

表-7 好きな系列 (中学校・高校を通して)

語 学 系	理 数 系	社 会 系	芸 術 系	体 育 系	技 術 系	計
2.9 (15)	66.2 (341)	13.6 (70)	6.2 (32)	7.0 (36)	4.1 (21)	100.0 (515)



表-8 親友及び尊敬できる教師の数 (中学校・高校を通して)

親友数	教 師 数				計
	0 人	1 人	2 人	3 人以上	
0 人	36.8 (14)	34.2 (13)	21.1 (8)	7.9 (3)	7.4 (38)
1 人	28.8 (21)	31.5 (23)	23.3 (17)	16.4 (12)	14.1 (73)
2 人	21.1 (28)	39.1 (52)	25.6 (34)	14.3 (19)	25.8 (133)
3 人以上	21.3 (58)	25.0 (68)	25.0 (68)	28.7 (78)	52.7 (272)
計	23.4 (121)	30.2 (156)	24.6 (127)	21.7 (112)	100.0 (516)

表-9 大きな影響を受けた時代

小学校時代	12.3 (63)
中学校時代	35.8 (183)
高校時代	36.0 (184)
大学時代	15.9 (81)
計	100.0 (511)

とも本学学生の基本的傾向を捉える上では十分な数と言えるだろう。学科別の数ではほぼ似かよったものであるが、学年別では1年, 2年, 3年がほぼ1:2:1の割合になっており, 2年目に偏りがある(なお1年目, 3年目については, 調査実施年度の心理学IIの講義受講生である。2年目については歴史学IIの受講生であり, 一部同年度心理学特講受講生が含まれている)。出身高校所在地に関する調査は, アイデンティティ形成上, 中学校・高校の時期が重要であることによっており, このことは表-9の結果からもうかがえる。また道内・外別と共に道内については北見市, 札幌市, 中都市(人口10万人以上), それ以外の市, 町村別にみており, 地域別の勉学・生活環境の基本的属性とアイデンティティ形成上との関わりをみるためのものである。好きな科目については, 工科系大学という性格から当然のごとく理数系科目に多くの回答がよせられているのであるが, 得意・不得意ということではなく好きであったかという設問であり, 他の教科への回答と比較検討できるだけの数がでてくると予測しての設問である。結果は表-5, 6, 7のごとくほぼ6:4(理数:その他)となり比較検討が可能となったと言える。他の属性については特別コメントすることはない。

## II. 工科系学生の心理特性等に関する検討

本章での検討対象項目は, 主にII群, III群の設問に関するものである。まずII群は, 学生の心理特性をさぐるため, それに関連すると思われる勉学・生活状況を中心にした設問である。

表-10で, よく話す, 話す方であると答えた比率が合せて71.9%であると出ているが, 表-11で現在入っている団体・クラブ等への加入比率は, 非加入と答えたものが46%で半数近くをしめている。また表-11で学年別の傾向をみると, 加入数において学年が進むにつれて低下傾向にある。3年目では, 非加入の比率がほぼ6割をしめており, 話す方ではあるが, それは組織的なものの中においてではなく, 個人的なつきあいの範囲でのものという点を一つの傾向として指摘できよう。

表-10 ふだんよく話しをするか

よく話す	26.9 (139)
話す方である	44.0 (227)
あまり話さない	26.9 (139)
ほとんど話さない	2.1 (11)
計	100.0 (516)

表-11 学年別団体・クラブ加入数

加入数	0	1	2	3	計
1年	45.2 (56)	32.3 (40)	16.9 (21)	5.6 (7)	24.1 (124)
2年	39.9 (107)	46.3 (124)	9.7 (26)	4.1 (11)	52.0 (268)
3年	58.5 (72)	34.1 (42)	5.7 (7)	1.6 (2)	23.9 (123)
計	45.6 (235)	40.0 (206)	10.5 (54)	3.9 (20)	100.0 (515)

表-12 ふだん読んでいる雑誌

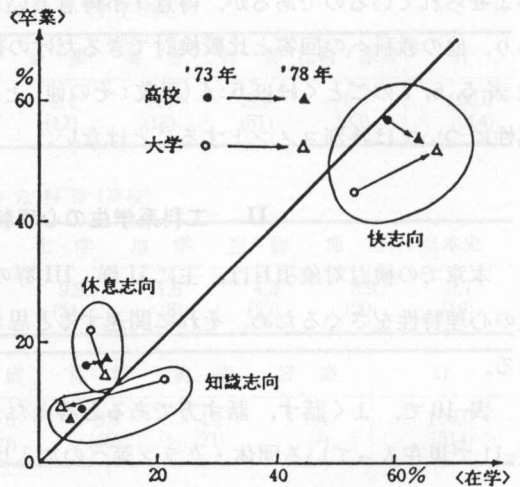
教養雑誌類	12.6 (65)
大衆娯楽雑誌類	39.5 (204)
漫画類	34.7 (179)
その他	4.8 (25)
ほとんど読まない	8.3 (43)
計	100.0 (516)

表-13 興味をもって読んでいる新聞紙面

政治面	11.9 (61)
経済面	1.8 (9)
スポーツ面	31.5 (162)
文化面	15.6 (80)
テレビ・ラジオ面	31.1 (160)
その他	8.2 (42)
計	100.0 (514)

表-12, 表-13では、大衆娯楽雑誌と漫画類をふだんよく読んでいると答えた比率が合せて74.2%となり、また新聞で最も興味をもって読む紙面は、スポーツ面とテレビ・ラジオ面であり合せて62.6%である。このことは彼らの生活パターンが「遊び」的要素を多分にもったものであることの反映としてみれる。ただ教養雑誌類12.6%、文化面15.6%、政治面11.9%という数字にみられるように教養・文化志向も一部分をしめている点も指摘しておきたい。(しかし教養雑誌類に関しては学年を追うごとに、16.1%、11.9%、9.8%と低下傾向にある)。

以上の調査結果から、一言でその一般的傾向をまとめると、「特定の団体・グループへ自主的・主体的に参加するという傾向はあまり強くなく、話しはする方だが多分に『遊び』的要素をもった中味の生活状況である」と言えるだろう。この点に関わってNHKの調査結果をみてみよう。大学生の余暇における過ごし方での志向性について、図-1のような傾向が表われている。すなわち大学生ではこの間('73年→'78年)快志向(好きなことをして楽しむ)が増大しており、知識志



(注) 休息志向とは「体をやすめ、あすに備えること」を意味する

出所：NHK放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会、1979年、95ページ

図-1 余暇の現状(若年層16~29歳の在学、卒業別)

向(知識を身につけたり,心を豊かにする)は急激な低下を示している。また両志向共大学生と高校生の相異がほとんどみられなくなっており,知識志向にいたっては高校生6%に対して大学生4%となってしまう。在学から卒業へのライフステージの変化による相異は73年とほぼ同様の相関関係を示している。以上の数字は,余暇の過ごし方において第1番目にあげた回答のものであるが2番目にあげた回答を含めた調査結果は,表-14のようになり,ここでもはっきりと

表-14 大学生の余暇の過ごし方の変化

	1973	1978
快 志 向	79	81
体 力 志 向	15	29
知 識 志 向	44	27

(注) 百分率表示のみ

出所: NHK 放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会, 1979年, 95ページより作成。

した快志向また体力志向(運動をし,体をきたえる)の増大と知識志向の低下がみられる<sup>1)</sup>。

こうした内容は,主な趣味・楽しみごとについてもあてはまる。表-15のように,音楽鑑賞,スポーツ,読書,ドライブ,映画,麻雀,スポーツ観戦に高い比率が表われている。更にこのことは表-16で一層明瞭になる。ここでは,学業に意欲をもっているが4.7%と極めて低く,学業以外に意欲をもっているが37.9%にもなり,前者の約8倍の数をしめしている。どちらも意欲をもっていないが14.6%となっている。いかに学業以外のウェイトが高いかがうかがえる。しかし表-17で学業問題での悩みが全体の4割余りをしめていることをみると,学業に対する意欲に欠けている部分が多いが学業上の問題に悩んでいると言える。だが表-18では学業問題での比率が12.2%と低率であることを考えると,このことは,多分に単位取得等の具体的な点での悩みと言えよう。つまり学業上の問題がアイデンティティ形成においてあまり重要

表-15 主な趣味・楽しみごと

映 画	ド ラ イ ブ	ス ポー ツ	音 楽 鑑 賞	マ イ コ ン	麻 雀	釣 り
27.2 (140)	29.0 (149)	38.3 (197)	53.9 (277)	12.5 (64)	22.6 (116)	4.9 (25)

旅 行	パ チ ン コ	囲 碁 ・ 将 棋	読 書	ス ポー ツ 観 戦	そ の 他	計
16.5 (85)	18.1 (93)	4.5 (23)	33.5 (172)	22.6 (116)	14.4 (74)	297.9 (1,531)

表-16 学業と学業以外への意欲

学 業 に 意 欲	4.7 (24)
学 業 以 外 に 意 欲	37.9 (195)
同 じ く ら い 意 欲	42.9 (221)
ど ち ら も 意 欲 な し	14.6 (75)
計	100.0 (515)

表-17 悩む問題

学 業 問 題	40.7 (209)
家 庭 問 題	2.5 (13)
異 性 問 題	13.1 (67)
思 想 問 題	13.1 (67)
就 職 ・ 進 路 問 題	19.3 (99)
身 体 問 題	1.9 (10)
そ の 他	9.4 (48)
	100.0 (513)

表-18 アイデンティティ形成の必要性を感じる問題

学業問題	12.2 (46)
家庭問題	4.8 (18)
異性問題	9.3 (35)
思想問題	33.2 (125)
就職・進路問題	30.1 (113)
身体問題	1.1 (4)
その他	9.3 (35)
計	100.0 (376)

表-19 アイデンティティ形成に影響を与えた本

日本文学類	18.3 (94)
外国文学類	5.6 (29)
ルポルタージュ・記録等	13.6 (70)
教科書類	2.9 (15)
宗教書類	2.3 (12)
学術書類	2.5 (13)
漫画・娯楽書類	10.3 (53)
その他	3.1 (16)
特定の本はない	41.2 (212)
計	100.0 (514)

な位置になりえていないということである。表-19で学術書類2.5%、教科書類2.9%を合せて5.4%という低い率もこのことを裏づけている。

次に本学学生の心理特性を検討していくことにする。その前に、石井完一郎氏が京大生への25年にわたる自殺研究として書かれた「現代学生の自殺とうつ病」と題する論文を一瞥しておきたい。表-20は京大での学部別自殺傾向である。工学部が比率において最も低い数字を示している。この点に関して氏は次のように述べておられる。

「25年間の自殺率学部別傾向は、文・教・理・法の順に平均より多いが、これ

は文・教が思弁型、理・法が合理型の学生が多くて思考内向化や純理的二分法思考に陥りやすい一方、他の5学部が応用科学系らしく現実吟味で優れた学生が多いことが自殺率の著しい高低に影響していると考えられる。また、文系(とくに女子)が理系より非常な有意差をもって男女ともに高率であるが、これは、サイドンがカリフォルニア大学パークレー分校で確かめた同様の差をジェームス(W. James)の区分する『傷つきやすい心 tender minded』と『タフな心 tough minded』との差に対応させている所見からも注目される。これら文系の特性は、とりわけ文系女子の場合に妥当するが、ひとしく現実を向こうにまわして対処する力 coping ability に欠け、現実から退行させやすいところにもうつ病へ導きやすい素地をもっていているように思われる<sup>2)</sup>」。

表-20 学部別自殺傾向(京大)

学部別	総数		(文理系別)	
	例数	比率	例数	比率
文 教 法 経	33 (6)	101 (108)	65 (8)	63.3 (94.1)
	6 (1)	81 (67)		
	20 (1)	53 (88)		
	6	25		
理 医 薬 工 農	28	76	78 (2)	37.4 (24.2)
	6 (1)	28 (84)		
	3	32		
	26	24		
農	15 (1)	45 (52)		
計	143 (10)	46.0 (59.6)	143 (10)	46.0 (59.6)

(注) 括弧内は女子内数, 比率はそれぞれの学生数への10万分比。

出所: 石井完一郎「現代学生の自殺とうつ病—京大生への25年研究から—」『サイコロジー』No. 30, サイエンス社, 1982年, 48ページより。

以上の応用科学系学生の特徴を、現実吟味に優れ、現実的対処力に富むという指摘をおこなっている点を念頭におきながら、本学学生の特徴をみていくことにする。まず表-21では各人の性格傾向が捉えられるが、この基本的内容を簡単に表現してみると、「消極的で、どちらかというのん気であるが、他面融通のきく学生」ということになろう。また逆の言い方をとると、「積極的で、どちらかという短気であり、融通のきかない学生」ということがあまり当てはまらない性格ということになろう。しかし表-22では「悩む」と答えた人が全体の77.2%をしめており、その内「よく悩む」と答えた人は約3割にもなる。この具体的中味については表-17のように、学業問題40.7%、就職進路問題19.3%となり、合せて60.0%をこうした問題が占めることになる。このことから、比較的具体的な問題についての悩みが主であり、思想及び異性等の比較的内面的な問題は少ないということが言える。この点では、先述の「消極的」、「のん気」、「融通がきく」という性格の反映と言ってもよいだろう。

表-21 自分自身の性格

積極的	35.4 (182)	のん気	55.8 (286)	融通がきく	64.8 (333)
消極的	64.6 (332)	短気	44.5 (229)	融通がきかない	35.2 (181)
計	100.0 (514)	計	100.0 (515)	計	100.0 (514)

表-22 悩み

よくある	29.5 (152)
時々ある	47.7 (246)
あまりない	17.2 (89)
ほとんどない	5.6 (29)
計	100.0 (516)

表-23 「世間体」と日本人の心理特性の問題

「世間体」	アイデンティティの困難性は日本人の心理特性による			
	考える	考えない	わからない	計
大いに気にする	67.0 (77)	14.8 (17)	23.3 (21)	22.5 (115)
少しは気にする	65.2 (206)	17.1 (54)	17.7 (56)	61.8 (316)
ほとんど気にしない	64.7 (44)	19.1 (13)	16.2 (11)	13.3 (68)
全く気にしない	75.0 (9)	8.3 (1)	16.7 (2)	2.3 (12)
計	65.8 (336)	16.6 (85)	17.6 (90)	100.0 (511)

表-23は「世間体」を気にすると答えた人が全体の84.3%という高率を示しているが、これは日本人の心理特性特有のものを多分にふくんでいるということを表わしていると言える。また「世間体」を気にする人程、アイデンティティ形成の困難性を日本人の心理特性と答えており、この点は常識的に理解しうるが、他方「世間体」を「全く気にしない」と答えた人の場合同じ項目に対する比率は75.0%と意外に高く、前者とは「逆の反応の仕方」と言える。このことは、「世間体」という言葉の中味が今日の学生にとっても意外と身近なものであると言えよう。

次にこの日本人の心理特性に対する学生の評価内容と自分自身の心理特性に対する評価



を、同じ選択肢において実施した。この両評価の関連をみていくことにする。表-24 でみるように、両者の間には明確な相異が確認できる。また項目毎にみると相異の仕方が多様である。

表-24 日本人及び自分自身の心理特性に対する評価

項目別	a		b		c		d		e		f	
	情緒志向	論理志向	保守志向	革新志向	形式志向	実質志向	画一的	多面的	没个性的	個性的	小市民的	社会的
日本人の心理特性	72.7	27.3	94.3	5.7	89.1	10.9	73.4	26.6	88.7	11.3	69.7	30.3
自分自身の心理特性	64.1	35.9	52.6	47.4	27.3	72.7	36.1	63.9	45.1	54.9	62.2	37.8

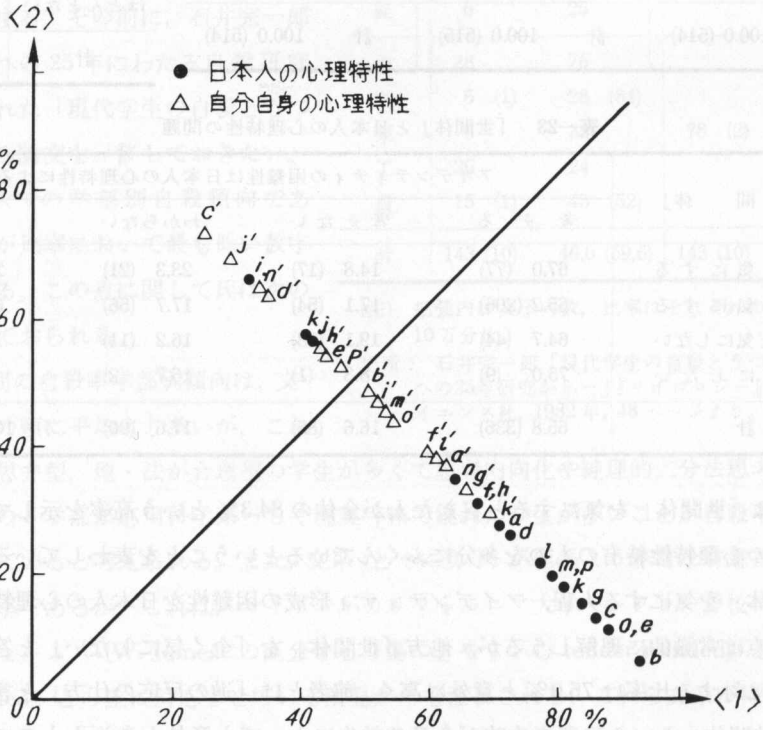
  

項目別	g		h		i		j		k		l	
	利己主義	利他主義	集団主義	個人主義	精神主義	物質主義	非合理主義	合理主義	中庸	極端	付和雷同	確固不動
日本人の心理特性	86.5	13.5	70.1	29.9	33.6	66.4	44.1	55.9	82.4	17.6	79.9	20.1
自分自身の心理特性	68.1	31.9	45.1	54.9	54.0	46.0	30.5	69.5	70.5	29.5	63.7	36.3

項目別	m		n		o		p		平均	
	過剰適応	自己主張	無責任	誠実	狭さ	広さ	陰	陽		
日本人の心理特性	81.8	18.2	67.2	32.8	89.6	10.4	81.4	18.6	75.3	24.7
自分自身の心理特性	54.2	45.8	35.8	64.2	56.1	43.9	48.6	51.4	50.9	49.1

(注) 数字は百分率のみ



(注) a, b, c, ... は設問 21, a', b', c', ... は設問 22 の各項を表わす。また各項の選択肢のうち前者, 後者の百分率が各々 1, 2 軸の成分となる。

図-2 日本人及び自分自身の心理特性に対する評価

この中で、大きな相異が確認できるのは、b, c, d, e 項であり、比較的相異が小さいのは、a, f, j, l 項である。図-2 は、表-24 を 1, 2 軸という座標軸において表わしたものである。設問 21 と 22 の回答群の開きが確認出来る。

この相異の大きい項目については、当人と日本人の心理特性（勿論これ自身彼らが評価したものに過ぎないが）のギャップが大きいということであり、このことは当人が現在所有している心理、それは多分にそうありたい、あるいはあるべきと思っている心理を含んだものであるが、これと他方での彼らが少くとも日本人の心理特性と評価したものと間にギャップを強く意識せざるをえない、そうした項目を表わしていると言える。従って、この項目は、多分に当人にとっては強制的意味あいをもったものとして考えられているものであり、強く否定したいという願望を含んだ日本人の心理特性と言える。この項目とは、保守志向——革新志向、形式志向——実質志向、画一的——多面的、没個性的——個性的である。これに対して相異の小さい項目は、逆に自分にとって受容できる比較的肯定的な項目と言える。この項目とは、情緒志向——論理志向、小市民的——社会的、非合理主義——合理主義、付和雷同——確固不動である。この内容をまとめてみると、自分自身は比較的革新志向で実質志向であり、かつ多面的、個性的でありたいと願っているが、多くの日本人は保守志向で形式志向であり、かつ画一的、没個性的なものであり不満である。しかし他方、日本人は情緒志向で、小市民的であり、かつ合理主義の立場をとり、また不和雷同的なところがあるがこの点は受容することができる、ということになる。

以上、勉学・生活状況と心理特性を検討してきた。次にアイデンティティ形成そのものについての諸傾向をみていくことにしよう。

#### 注)

- 1) NHK 放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会, 1979 年, 94-95 ページ。
- 2) 石井完一郎「現代学生の自殺とうつ病——京大生への 25 年研究から——」(『サイコロジー』No. 30, 特集=現代社会とうつ病, サイエンス社, 1982 年 9 月, 48-49 ページ)。

### III. アイデンティティ形成上の諸傾向

ここでは基本的諸属性とアイデンティティ形成上との関連性をみることを通して、更にアイデンティティ形成そのものに関する諸傾向をみいだすことに課題がある。

#### 地域別傾向

道外者は表-25 にみられるように A, B, D, E, G, Ha・b 項のいずれも高い比率を示しており、F 項については身近な人間関係、集団、組織の影響が強いと出ている。道内者に比べてアイデンティティ形成に対する自信をうかがわせている。また道内地域別では若干の相異がみられるが、明確な傾向はみられない。

表-25 地域

項目 地域別	「自分なりの 考え」がある と思う	アイデンティ ティ形成の必 要性を感じる	[B] 項の必要性は、どの問題にぶつ かった時か			アイデンティ ティ形成は集 団・組織の在 り方に関わる と考える
			[C] 学業問題 (a)	[C] 思想問題 (b)	[C] 就職・進路 問題 (c)	
道内	69.4	70.5	11.9	33.4	30.7	70.3
道外	78.8	90.4	14.9	31.9	25.5	82.7
全体	70.4	72.5	12.2	33.2	30.1	71.5
北見	75.0	75.0	9.8	31.4	43.1	76.5
札幌	70.0	70.2	10.7	35.7	23.8	71.9
旭川等	61.6	72.7	15.1	27.4	37.0	68.7
上記以外の市	71.9	70.4	11.0	36.6	24.4	67.3
町村	69.8	62.5	12.2	36.6	29.3	66.7
全体	69.4	70.4	11.8	33.5	30.5	70.0

兄弟姉妹数別

この属性では、明確な相関がみられる(表-26)。まずA項では数が増えるにつれて比率が低下し、B項では逆に増大しており、各々負と正の相関にある。また両項間の比率は負の相関にある。C項a, b, c各々についても負、負、正の相関にある。以上から一人っ子は相対的に「自分なりの考え」があると思うという比率が高く、また3人以上の者はアイデンティティ形成の必要をより強く感じていると言える。また一人っ子がアイデンティティ形成の必要性を感じるのは、学業問題、思想問題に関してであり、就職・進路問題は明確に低い比率となっている。D, E, F a項はいずれも兄弟姉妹数とほぼ正の相関にある。G項では一人っ子の約3分の1が、アイデンティティ形成上自信ありと答えているが、3人以上の兄弟姉妹では半分の人が自信ありと答えており、兄弟姉妹数が大きな影響を示していると言える。H項では一人っ子のみが、個人志向よりも社会志向を強く表わしている。全体的にみると一人っ子は、精神面での強さを、その環境的要因から要請されていると言え、それ故に精神面での比較的高い緊張感を示さざるをえない状況と見受けられる。

表-26 兄弟姉妹数別

兄弟姉妹数	[A]	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
1人	72.4	69.0	15.0	45.0	15.0	75.0	64.3	37.9	24.1	6.9	31.0	34.5	20.7	27.6
2人	71.0	71.7	13.2	31.3	29.6	70.7	64.6	47.4	15.3	11.4	25.8	43.8	42.8	19.6
3人	70.6	74.8	10.5	35.8	31.6	71.4	68.5	44.1	16.5	8.7	30.7	49.6	41.7	22.0
4人以上	58.3	75.0	5.6	33.3	44.4	79.2	70.8	58.3	8.3	8.3	25.0	50.0	41.7	20.8
全体	70.4	72.5	12.2	33.2	30.1	71.5	65.8	46.6	15.8	10.3	27.3	45.0	41.2	20.7

(注) 各項の内容は表-25で定めたアルファベットで代表させる。(以下同様)

別 傾 向

アイデンティティ形成の困難は日本人の心理特性にある [E]	アイデンティティ形成上の困難のうち原因の第1番目にあげたもの [F]				アイデンティティ形成に自信がある [G]	将来の生き方 [H]	
	自分 (a)	身近な人間関係 (b)	集団・組織 (c)	社会 (d)		個人的志向性 (a)	社会的志向性 (b)
65.7	47.3	15.2	10.2	27.3	44.2	41.1	20.0
67.3	40.3	21.2	11.5	26.9	51.9	42.3	26.9
65.8	46.6	15.8	10.3	27.3	45.0	41.2	20.7
67.6	47.1	19.1	13.2	20.6	44.1	41.8	14.9
61.2	41.3	17.4	9.1	32.2	43.3	40.8	22.5
65.3	45.5	12.1	10.1	32.3	46.5	40.4	23.2
72.8	53.1	12.4	10.6	23.9	44.6	41.2	19.3
58.1	50.8	15.9	11.1	22.2	42.9	42.9	15.9
65.4	47.2	15.1	10.6	27.2	44.4	41.3	19.9

クラブ活動参加有無別 (中学校・高校)

まず全体的特徴としては (表-27, 28), 運動クラブ参加有無の方が文化クラブのそれに比べて, その間により大きな相異が見受けられる。運動クラブへ参加した者は, そうでない者に比べて明らかに自分の生き方, アイデンティティ形成の全般にわたって自信を示している。C項 b の思想問題での比率が中学校での参加者 26.4% (高校 23.4%……以下括弧内は高校) に対して非参加者 41.9% (39.0%) と高く, また G 項のアイデンティティ形成に対して自信ありとする比率が, 前者 49.5% (50.8%) に対して後者 39.0% (42.0%) と 10% もの開きがある。

表-27 運動クラブ参加有無別 (中学・校高校)

上段中学校 下段高校	[A]	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
参加	74.9	70.3	14.2	26.4	32.5	73.9	65.9	48.0	13.8	11.1	27.2	49.5	42.8	22.7
非参加	63.3	75.0	9.4	41.9	26.9	68.1	66.0	45.0	19.0	9.5	26.5	39.0	38.8	17.7
全体	70.1	72.3	12.1	33.1	30.1	71.5	65.9	46.8	15.9	10.4	26.9	45.2	41.1	20.7
参加	79.5	69.0	16.1	23.4	27.7	72.8	64.9	49.2	14.4	8.7	27.7	50.8	41.0	20.5
非参加	64.3	74.6	9.7	39.0	31.4	70.7	66.6	44.9	16.9	11.5	26.8	42.0	41.2	20.8
全体	70.1	72.5	12.1	33.2	30.0	71.5	65.9	46.6	15.9	10.4	27.1	45.4	41.1	20.7

文化クラブについては, その参加, 非参加者間には運動クラブ程の相異はないが, 比率の大小の出方が運動クラブの参加, 非参加者間の関係とは逆になっているものが多くある。それは B 項, C 項 a, b, c, D, E, F a 項である。他の項目は, 運動クラブと同じ出方ではあるが, それに比べては数字の開きが小さい。

表-28 文化クラブ参加有無別 (中学校・高校)

上段中学校 下段高校	[A]	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
参 加	71.8	79.8	4.0	43.4	28.3	71.8	67.7	45.2	17.7	9.7	27.4	48.4	43.4	23.8
非 参 加	69.1	70.2	15.2	29.6	30.4	72.0	65.9	47.2	15.0	10.8	26.9	43.9	40.3	19.7
全 体	69.8	72.5	12.2	33.3	29.8	72.0	66.3	46.7	15.7	10.5	27.0	45.0	41.0	20.7
参 加	72.3	79.2	7.9	42.1	23.8	74.8	67.3	40.3	15.7	11.3	32.7	46.5	43.0	24.1
非 参 加	68.8	69.3	14.3	28.7	33.3	70.5	65.8	49.7	15.6	10.1	24.6	44.1	40.2	19.4
全 体	69.9	72.4	12.2	33.2	30.0	71.9	66.3	46.7	15.6	10.5	27.1	44.8	41.1	20.8

## 好きな科目・系列別 (中学校・高校)

中学校・高校を通して好きであった系列別 (表-29) については、実数の偏りの関係で比較可能なのは、理数系と社会系である。この間には若干の相異がみられる。とりわけ A, Ca 及び H 項である。理数系を好むと答えた者が、幾分か社会系に比べて個人志向であり、かつ相対

表-29 系 列 別

系列別	[A]	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
語 学 系	73.3	66.7	10.0	10.0	40.0	86.7	80.0	46.7	20.0	6.7	26.7	35.7	33.3	20.0
理 数 系	71.6	72.5	11.2	34.7	31.9	71.8	68.5	48.1	15.2	10.3	26.4	44.1	41.6	20.8
社 会 系	62.3	77.1	20.8	28.3	26.4	68.6	67.6	44.9	13.0	13.0	29.0	47.8	34.8	27.5
芸 術 系	62.5	65.6	0.0	47.6	19.0	65.6	50.0	35.5	29.0	9.7	25.8	54.8	50.0	20.0
体 育 系	71.4	72.2	23.1	26.9	26.9	82.9	52.8	50.0	8.3	8.3	33.3	44.4	44.4	8.3
技 術 系	85.7	71.4	0.0	33.3	26.7	57.1	52.4	38.1	23.8	9.5	28.6	42.9	42.9	19.0
全 体	70.4	72.5	12.2	33.2	30.1	71.5	65.8	46.6	15.8	10.3	27.3	45.0	41.2	20.7

表-30 科 目 別

上段中学校 下段高校	[A]	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
数 学	69.3	70.6	16.3	32.6	31.8	70.9	71.1	46.1	16.3	9.6	28.1	44.4	39.1	20.7
理 科	76.9	70.0	8.8	30.8	30.8	70.5	64.3	46.9	18.5	10.8	23.8	49.6	48.1	20.9
社 会	68.5	67.3	21.1	28.9	26.3	67.3	71.2	42.6	14.8	9.3	33.3	31.5	29.6	20.4
9教科全体	70.3	72.4	12.3	33.3	30.1	71.5	65.8	46.5	15.8	10.4	27.3	44.9	41.1	20.7
数 学	71.1	69.7	11.0	31.0	35.0	75.4	68.1	50.4	17.3	10.1	22.3	42.6	36.4	20.7
物 理	72.6	77.3	16.9	42.7	22.0	69.4	70.3	46.7	9.3	13.3	30.7	52.7	48.6	17.6
化 学	68.6	68.6	11.4	34.3	25.7	66.7	68.6	52.9	11.8	7.8	27.5	27.5	41.2	17.6
18教科全体	70.3	72.4	12.0	33.0	30.1	71.5	65.8	46.7	15.6	10.4	27.3	44.9	41.3	20.5



的に性格上「安定」していると言える。(勿論ここでいう「安定」の中味については、一定の価値基準に基づいて述べているものではない。あくまで常識的な使い方である)。

理数系をこのように整理した上で、次に中学校の数学、理科別、そして高校の数学、物理、化学別にみていくと(表-30)、その間に明確な相異がみられる。しかし各々において一定の傾向性があるとは指摘できない。

以上基本的属性別に、アイデンティティ形成に関する諸傾向をみてきた。次にこの点を更に深めるために、アイデンティティ形成に関する設問間の諸傾向を吟味していくことにする。属性別の前掲各表では、設問 25 を出発点として各項が列記されていた。「自分なりの考え」があると思う者が全体の 7 割をしめていたことから、まずこの点について吟味していくことにする。

表-31 では「自分なりの考え」があると思うと答えた人程、アイデンティティ形成の必要を感じていると答える比率が高くなっており、逆に「自分なりの考え」あるとは思わないと答えた人が、65.5% という相対的に低い比率を示している。この数字から言えることは、「自分なりの考え」の有無はアイデンティティ形成上の一つのメルクマールであるということである。またこの点は、「自分なりの考え」があるとは思わないという人の 4 分の 1 が、アイデンティティの必要性についてわからないと答えていることによっても言える。D, E 項では、「自分なりの考え」があると思うと答えた者が、高い比率を示しており、外的環境要因を意識していると言える。このことは、Fa, b 項と Ha 項での数字でも表われている。またこうした外的環境要因を意識しつつも、アイデンティティ形成上で自信ありと答えた比率が、他と比べて明らかな高率を示している。

表-31 「自分なりの考え」

「自分なりの考え」があると思うか	[B]	[C]			[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
		(a)	(b)	(c)			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
思 有	74.2	11.2	32.0	29.7	75.3	67.6	42.3	18.4	10.6	28.7	55.7	40.9	25.1
思 有	65.5	13.2	39.5	34.2	63.8	62.1	60.3	12.1	6.9	20.7	13.8	42.1	7.0
思 有	69.1	12.1	36.4	30.3	61.7	61.3	54.8	8.6	9.7	26.9	23.7	39.8	12.9
全 体	72.3	11.5	33.5	30.3	71.5	65.8	46.7	15.9	10.0	27.5	45.1	40.9	20.8

設問 26 A に関する表-32 では、アイデンティティの必要性を感じるということが、D, E 項での高い比率、Ha, b 項の両者の比率が高くなっている。またわからないと答えた者は、Fa 項で高い数字を示し、G 項では明らかな低さを示している。Ha 項が平均的な数字を示しながら Hb 項が異常に低いことが特徴的である。

表-33, 表-34 では、ほぼ常識的な相関関係がみられる。ただ G 項については、両方の表とも、集団・組織の在り方に密接に関わっているとは思えないと答えた者が、アイデンティティ

表-32 アイデンティティ形成の必要性

必要性	[D]	[E]	[F]				[G]	[H]	
			(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
感じる	76.0	70.2	45.6	15.8	11.8	26.8	49.6	42.9	24.3
感じない	63.2	63.2	44.6	23.2	7.1	25.0	54.5	29.8	15.8
わからない	57.6	48.2	52.4	10.7	6.0	31.0	18.1	41.7	8.3
全体	71.5	65.8	46.6	15.8	10.3	27.3	45.0	41.2	20.7

表-33 集団と組織の在り方との関わり

関わり	[E]	[F]				[G]	[H]	
		(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
考える	70.7	41.8	17.8	11.7	28.7	45.7	39.7	23.0
考えない	55.6	59.3	11.1	9.3	20.4	59.3	45.3	15.1
どちらとも言えない	52.7	58.9	11.1	4.4	25.6	35.2	42.9	15.4
全体	65.9	46.7	15.9	10.2	27.3	45.3	40.9	20.8

表-34 日本人の心理特性との関わり

関わり	[F]				[G]	[H]	
	(a)	(b)	(c)	(d)		(a)	(b)
考える	42.7	16.9	10.7	29.7	45.7	44.8	22.1
考えない	54.2	13.3	14.5	18.1	53.6	34.5	23.8
わからない	54.4	14.4	5.6	25.6	36.0	34.4	13.3
全体	46.7	15.9	10.4	27.1	45.3	41.3	20.8

表-35 アイデンティティ形成の困難性

困難性	[G]	[H]	
		(a)	(b)
自分	41.2	39.7	19.2
身近な人間関係	57.5	33.8	25.0
集団・組織	50.9	45.3	24.5
社会	42.4	46.8	18.7
全体	45.1	41.3	20.5

表-36 アイデンティティ形成の自信

自信	[H]	
	(a)	(b)
ある	42.4	28.4
ない	39.6	1.9
なんとも言えない	39.6	17.6
全体	40.9	20.8

(注) 困難性は第1番目にあげた原因のみ記入している。

の形成に自信ありと答える比率が59.3%と53.6%と高く出ており、逆にどちらとも言えないと答えた者は、35.2%と36.0%と低くなっている。次に表-35では、アイデンティティ形成の困難を身近な人間関係にあるという点を第1の原因としてあげたものが、最もアイデンティティ形成の自信を示しており、その次は集団・組織に原因を求めているものが高い比率を示している。またこの回答を選んだものは、Hb項で共に他より高い数字を示しており、更に前者につ

いては Ha 項で個人的志向性への傾向が比較的小さいと言える。アイデンティティ形成の困難が社会にあると答えた者は、アイデンティティ形成に自信ありと答える比率が少ないと共に、Ha 項で高率、Hb 項で低率を相対的に示している。困難の原因が社会にあるという見方が、個人的志向性にむかわせ、社会的志向性を減少させているという傾向ともみれる。

表-36 では、アイデンティティ形成の自信があると答えた者が、Hb 項で高い数字を示し相対的に社会的志向性への傾向がうかがえる。個々人のアイデンティティ形成への自信は、社会的志向性との間に、一定の正の相関にあると言える。逆にアイデンティティ形成の自信なしと答えた者の社会的志向性は、Hb 項での 1.9% の数字から考えると弱いと言える。

アイデンティティ形成の困難を、個人あるいは社会にあるという捉え方の両者は、アイデンティティ形成に自信ありと答える比率が少なく、逆に身近な人間関係、集団・組織にあるとする捉え方の方が高い比率を示している。またこの自信ありと答えた者が、個人的志向性においても他に比べて幾分高い数字が出ており、そして社会的志向性の比率においても相対的に高率を示している。

### 今後の課題

以上アンケート調査結果に基づいて種々の検討を加えてきた。しかし断わるまでもないが、これらの得た数字は、あくまで現象に表われたものにしかすぎない。現象の奥に隠された本質へと導くには、そこに研究者の問題意識に依拠した様々な角度からの学的認識行為が必要となる。また現代青年及び本学学生の心理とアイデンティティに関する分析は、深遠な人間論との同時平行的考察も不可欠であろう。しかし限られたデータ及び私自身のもっている現代人に対するいまだ不十分な人間論は、本稿で課された目的に対して一定の不十分性を残すこととなったであろう。最後に今後の課題として3点をあげておくことにする。第1に、工科系以外の他の学問分野の学生、また同世代の青年層との比較研究、第2に、本学学生に対する面接調査、第3に歴史的、社会的側面をも含めた検討、とりわけ日本人間関係、日本人の心理特性という特殊日本的なものへのアプローチ、以上である。

### 追記

本稿の基礎となったアンケート調査結果のデータ整理に際して、中岡良司氏(開発工学科)の御協力を得た。記して感謝の意を表わすものである。

### 参考文献

- 1) Erik H. Erikson: Identity and the life cycle, New York; International University Press 1959. 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房, 1973年.
- 2) Erik H. Erikson: Childhood and Society, Penguin Books, 1965. 仁科弥生訳『幼年期と社会』みすず書房, 1977年.

- 3) 南 博：『人間行動学』岩波書店，1980年。
- 4) 『現代人の病理全5巻』誠信書房，1975年。
- 5) 佐藤 毅・石川弘義・折橋徹彦編：『現代の社会心理』誠信書房，1979年。
- 6) 井上忠司：『「世間体」の構造』日本放送出版協会，1977年。
- 7) 吉田 昇・門脇厚司・児島和人編：『現代青年の意識と行動』日本放送出版協会，1978年。
- 8) NHK 放送世論調査所編：『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会，1979年。
- 9) 『青年心理 36・38』金子書房，1983年。
- 10) 笠原 嘉・山田和夫編：『キャンパスの症状群——現代学生の不安と葛藤——』弘文堂，1981年。
- 11) 宮本忠雄編：『現代のエスプリ——現代人の精神構造——』至文堂，1973年。
- 12) 『サイコロジー』No. 22 (特集=日本人の心理構造)，No. 30 (特集=現代社会とうつ病)，サイエンス社，1982年。
- 13) 生命保険文化センター・野村総合研究所編：『日本人の生活価値観——将来社会展望のために——』東洋経済新報社，1980年。
- 14) 文部省大学局学生課編：『大学と学生』第191号・特集現代学生生活，第一法規出版，1982年。
- 15) 総理府青少年対策本部編：『組織で働く青少年の意識』大蔵省印刷局，1979年。
- 16) 大平総理の政策研究会報告書——9『多元化社会の生活関心』大蔵省印刷局，1980年。
- 17) 竹内真一監修：『労働青年白書』学習の友社，1982年。
- 18) 通商産業省・機械情報産業局編：『豊かな情報化社会への道標——産業構造審議会情報産業部会答申——』コンピュータ・エージ社，1981年。
- 19) A. トフラー，徳山二郎監訳：『第三の波』日本放送出版協会，1980年。
- 20) J. ワイゼンbaum，秋葉忠利訳：『コンピュータ・パワー——人工知能と人間の理性——』サイマル出版会，1979年。





7. 地学 (1.6, 8)    8. 生物 (4.3, 22)    9. 地理 (3.9, 20)  
 10. 日本史 (3.7, 19)    11. 世界史 (4.9, 25)    12. 倫社 (4.5, 23)  
 13. 政経 (3.9, 20)    14. 英語 (2.3, 12)    15. 家庭 (0.0, 0)  
 16. 体育 (8.7, 45)    17. 美術 (4.1, 21)    18. 音楽 (1.4, 7)

問7. 科目を以下のように系列別になると、あなたが中学校、高校の全体を通して好きな(あるいは興味をもった)系列はどれですか。1つだけ選んで下さい。

1. 語学系(国語・英語) (2.9, 15)    2. 理数系 (66.3, 342)    3. 社会系 (13.6, 70)  
 4. 芸術系 (6.2, 32)    5. 体育系 (7.0, 36)    6. 技術系(家庭科を含む) (4.1, 21)

問8. あなたは、中学校、高校を通して親友と呼べる人は何人いましたか。

1. 0人 (7.4, 38)    2. 1人 (14.1, 73)    3. 2人 (25.8, 133)  
 4. 3人以上 (52.7, 272)

問9. あなたは、中学校、高校を通して尊敬できる教師は何人いますか。

1. 0人 (23.4, 121)    2. 1人 (30.2, 156)    3. 2人 (24.6, 127)  
 4. 3人以上 (21.7, 112)

## II 群

問10. あなたは、ふだんよく人と話しますか。

1. よく話す (26.9, 139)    2. 話す方である (44.0, 227)  
 3. あまり話さない (26.9, 139)    4. ほとんど話さない (2.1, 11)

問11. あなたが、現在入っている団体、サークル、クラブ、グループ等(学内外)の数はいくつですか。

1. 0 (45.7, 236)    2. 1つ (39.9, 206)    3. 2つ (10.5, 54)  
 4. 3つ以上 (3.9, 20)

問12. あなたが、ふだんよく読んでいる雑誌の類は次のどれですか。1つだけあげて下さい。

1. 教養雑誌類 (12.6, 65)    2. 大衆娯楽雑誌類 (39.5, 204)  
 3. 漫画類 (34.7, 179)    4. その他 (4.8, 25)    5. ほとんど読まない (8.3, 43)

問13. あなたが、新聞で最も興味をもって読む紙面はどれですか。1つだけあげて下さい。

1. 政治面 (11.9, 61)    2. 経済面 (1.8, 9)    3. スポーツ面 (31.5, 162)  
 4. 文化面 (15.6, 80)    5. テレビ・ラジオ面 (31.1, 160)    6. その他 (8.2, 42)

問14. あなたの主な趣味・楽しみごとは、以下のうちどれですか。3つ答えて下さい。

1. 映画 (27.2, 140)    2. ドライブ (29.0, 149)    3. スポーツ (38.3, 197)  
 4. 音楽鑑賞 (53.9, 277)    5. マイコン (12.5, 64)    6. 麻雀 (22.6, 116)  
 7. 釣り (4.9, 25)    8. 旅行 (16.5, 85)    9. パチンコ (18.1, 93)  
 10. 囲碁・将棋 (4.5, 23)    11. 読書 (33.5, 172)    12. スポーツ観戦 (22.6, 116)

## 13. その他 (14.4, 74)

問15. あなたは、学業と学業以外への意欲について、どのように考えていますか。

1. 学業に意欲をもっている (4.7, 24)
2. 学業以外に意欲をもっている (37.4, 195)
3. どちらも同じくらい意欲をもっている (42.9, 221)
4. どちらも意欲をもっていない (14.6, 75)

## III 群

問16. あなたの性格について、以下それぞれ2つから1つを選んで下さい。

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| A. 1. 積極的 (35.4, 182)   | 2. 消極的 (64.6, 332)     |
| B. 1. のん気 (55.5, 286)   | 2. 短気 (44.5, 229)      |
| C. 1. 融通がきく (64.8, 333) | 2. 融通がきかない (35.2, 181) |

問17. あなたはよく悩むことがありますか。

1. よくある (29.5, 152)
2. 時々ある (47.7, 246)
3. あまりない (17.2, 89)
4. ほとんどない (5.6, 29)

問18. あなたは、どのような問題で最も悩みますか。1つだけあげて下さい。

1. 学業問題 (40.7, 209)
2. 家庭問題 (2.5, 13)
3. 異性問題 (13.1, 67)
4. 思想問題 (13.1, 67)
5. 就職・進路問題 (19.3, 99)
4. 身体問題 (1.9, 10)
7. その他 (9.4, 48)

問19. あなたは、現在心をうちあけて話せる友人がいますか。

1. いる (65.6, 338)
2. いない (34.4, 177)

問20. あなたは、周囲の目(「世間体」)を気にしますか。

1. 大いに気にする (22.3, 115)
2. 少しは気にする (62.1, 320)
3. ほとんど気にしない (13.2, 68)
4. 全く気にしない (2.3, 12)

問21. あなたが日本人の心理特性を一言であらわすとすれば、それは以下のどれですか。それぞれ2つから1つを選んで下さい。

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| a. 1. 情緒志向 (72.7, 372) | 2. 論理志向 (27.3, 140) |
| b. 1. 保守志向 (94.3, 482) | 2. 革新志向 (5.7, 29)   |
| c. 1. 形式志向 (89.1, 456) | 2. 実質志向 (10.9, 56)  |
| d. 1. 画一的 (73.4, 376)  | 2. 多面的 (26.6, 136)  |
| e. 1. 没个性的 (88.7, 454) | 2. 个性的 (11.3, 58)   |
| f. 1. 小市民的 (69.7, 357) | 2. 社会的 (30.3, 155)  |
| g. 1. 利己主義 (86.5, 442) | 2. 利他主義 (13.5, 69)  |
| h. 1. 集団主義 (70.1, 359) | 2. 個人主義 (29.9, 153) |

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| i. 1. 精神主義 (33.6, 172)  | 2. 物質主義 (66.4, 340) |
| j. 1. 非合理主義 (44.1, 226) | 2. 合理主義 (55.6, 286) |
| k. 1. 中庸 (82.4, 422)    | 2. 極端 (17.6, 90)    |
| l. 1. 付和雷同 (79.9, 409)  | 2. 確固不動 (20.1, 103) |
| m. 1. 過剰適応 (81.8, 419)  | 2. 自己主張 (18.2, 93)  |
| n. 1. 無責任 (67.2, 344)   | 2. 誠実 (32.8, 168)   |
| o. 1. 狭さ (89.6, 459)    | 2. 広さ (10.4, 53)    |
| p. 1. 陰 (81.4, 416)     | 2. 陽 (18.6, 95)     |

問22. あなた自身の心理特性についてはどうなりますか。同じように選んで下さい。

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| a. 1. 情緒志向 (64.1, 328)  | 2. 論理志向 (35.9, 184) |
| b. 1. 保守志向 (52.6, 269)  | 2. 革新志向 (47.4, 242) |
| c. 1. 形式志向 (27.3, 140)  | 2. 実質志向 (72.7, 372) |
| d. 1. 画一的 (36.1, 185)   | 2. 多面的 (63.9, 327)  |
| e. 1. 没个性的 (45.1, 231)  | 2. 个性的 (54.9, 281)  |
| f. 1. 小市民的 (62.2, 318)  | 2. 社会的 (37.8, 193)  |
| g. 1. 利己主義 (68.1, 348)  | 2. 利他主義 (31.9, 163) |
| h. 1. 集団主義 (45.1, 231)  | 2. 個人主義 (54.9, 281) |
| i. 1. 精神主義 (54.0, 276)  | 2. 物質主義 (46.0, 235) |
| j. 1. 非合理主義 (30.5, 156) | 2. 合理主義 (69.5, 356) |
| k. 1. 中庸 (70.5, 361)    | 2. 極端 (29.5, 151)   |
| l. 1. 付和雷同 (63.7, 325)  | 2. 確固不動 (36.3, 185) |
| m. 1. 過剰適応 (54.2, 276)  | 2. 自己主張 (45.8, 233) |
| n. 1. 無責任 (35.8, 182)   | 2. 誠実 (64.2, 327)   |
| o. 1. 狭さ (56.1, 287)    | 2. 広さ (43.9, 225)   |
| p. 1. 陰 (48.6, 249)     | 2. 陽 (51.4, 263)    |

#### IV 群

これから「アイデンティティ形成」という言葉がでできます。よく耳にする言葉ですが、その内容を簡単に説明しておきます。

アイデンティティとは、

「自己同一性」と訳され、人格の統合性、一貫性を示す言葉、または自分がほかならぬ自分であるという確信ないし感覚をいう。

従って、アイデンティティが失なわれると、自分が何であるのか、はっきりわからなくなり、生き生きとした存在感がもてなくなる。つまりアイデンティティの形成とは、

一言でいうと、人格形成、自我の確立といってよいでしょう。青年期はアイデンティティ形成・確立期といえます。

- 問23. あなたが自らのアイデンティティ形成において、大きな影響をうけたと思われる時代はどれですか。1つだけあげて下さい。
1. 小学校時代 (12.2, 63)
  2. 中学校時代 (35.9, 185)
  3. 高校時代 (36.1, 186)
  4. 大学時代 (15.7, 81)
- 問24. 今迄において、あなたのアイデンティティ形成に最も影響を与えた人と本を下記より、それぞれ1つだけ選んで下さい。
- A. 人について
1. 父 母 (20.2, 104)
  2. 兄弟姉妹 (2.5, 13)
  3. 親 戚 (0.8, 4)
  4. 友 人 (42.1, 217)
  5. 教 師 (8.0, 41)
  6. そ の 他 (4.9, 25)
  7. 特定の人はいない (21.6, 111)
- B. 本について
1. 日本文学類 (18.3, 94)
  2. 外国文学類 (5.7, 26)
  3. ルポルタージュ、自伝、記録及び写真集類 (13.6, 70)
  4. 教科書類 (2.9, 15)
  5. 宗教書類 (2.3, 12)
  6. 学術書類 (2.5, 13)
  7. 漫画・娯楽書類 (10.3, 53)
  8. そ の 他 (3.1, 16)
  9. 特定の本はない (41.1, 211)
- 問25. あなたは「自分なりの考え」がある人間だと思いますか。
1. 思う (70.3, 360)
  2. 思わない (11.3, 58)
  3. どちらとも言えない (18.4, 94)
- 問26. 現在あなたはアイデンティティ形成の必要性を感じますか。
- A. 1. 感じる (72.4, 373) 2. 感じない (11.1, 57) 3. わからない (16.5, 85)
- B. 1. と答えた人について その場合、必要性を最も強く感じるのは、どのような問題にぶつかった場合ですか。1つだけあげて下さい。
1. 学業問題 (12.0, 45)
  2. 家庭問題 (4.8, 18)
  3. 異性問題 (9.3, 35)
  4. 思想問題 (33.3, 125)
  5. 就職・進路問題 (30.1, 113)
  6. 身体問題 (1.1, 4)
  7. そ の 他 (9.3, 35)
- 問27. あなたにとってアイデンティティ形成は、集団・組織の在り方と密接に関わっていると考えますか。
1. 考 え る (71.5, 366)
  2. 考 え ない (10.5, 54)
  3. どちらとも言えない (18.0, 92)
- 問28. 現代は、アイデンティティ形成が困難な時代であると言われますが、あなたはその困難を現代日本人に共通する心理特性に起因するものであると考えますか。
1. 考 え る (65.8, 336)
  2. 考 え ない (16.6, 8.5)
  3. わからない (17.6, 90)
- 問29. あなたがアイデンティティ形成に困難を感じる場合、その主な原因が、どこにあると考

えますか。以下の4つを原因の大きい順にならべて下さい\*。

- 原因は 1. 自分にある (46.6, 239) 2. 身近な人間関係にある (15.8, 81)  
 3. 集団・組織等の在り方にある (10.3, 53)  
 4. 社会の構造と機能にある (27.3, 140)

問30. あなたは、アイデンティティを形成する自信がありますか。

1. ある (45.0, 230) 2. ない (10.4, 53) 3. なんとも言えない (44.6, 228)

## V 群

問31. あなたは将来どのように生きていきたいですか。以下から1つを選んで下さい\*\*。

1. 世間の目を気にせず、自分のやりたいことを楽しむ (41.2, 211)  
 2. 現状に甘んじ、与えられた範囲で自分の生活を楽しむ (16.4, 84)  
 3. 世の中のことはなりゆきにしたがってその日を平穏に過ごす (11.3, 58)  
 4. よりよい社会の実現をめざして積極的に努力する (20.7, 106)  
 5. いまの社会を大切に、それを守ることに努力する (5.3, 27)  
 6. 社会とのかかわりをなるべく避け、ひたすら修業にはげむ (5.1, 26)

\* 数字は原因の第1番目にあげたもののみの集計

\*\* この選択肢は、吉田丹他編『現代青年の意識と行動』日本放送出版協会、1978年の「タイプ別生き方」を用いている。